

ウジェーヌ・ボザの《コンチェルティーノ》(1938) についての一考察 ——イベールの《コンチェルティーノ・ダ・カメラ》と比較して——

所美樹 愛知県立芸術大学大学院音楽研究科 (音楽学領域)

要旨

ウジェーヌ・ボザ Eugène Bozza (1905-1991) はフランスの作曲家、指揮者、ヴァイオリニストである。ボザは、この3つの分野すべてにおいて成功したが、一般的には作曲家として知られており、とりわけ管楽器のための室内楽作品がよく演奏される。作曲家としてのボザのキャリアは、1932年にパリ音楽院に入学し、フランスの若手作曲家にとっての登竜門だったローマ賞を1934年に受賞したことから始まる。ボザはローマ賞の褒賞として、ローマのヴィラ・メディチに1935年から1938年まで滞在した。当時パリのサクソフーン界では、マルセル・ミュール Marcel Mule (1901-2001) の活躍が目覚ましかった。

ボザはローマ滞在中の1938年、独奏アルト・サクソフーンとオーケストラのための《コンチェルティーノ *Concertino*》を作曲し、ミュールに献呈した。同様に、《アリア *Aria*》(1936) や《アンダンテとスケルツォ *Andante et scherzo*》(1938) もローマで作曲され、ミュールに献呈されており、《コンチェルティーノ》とともに、今日でも演奏される作品となっている。だが、これらの作品を含め、ボザのサクソフーン作品に関する研究はほとんどないどころか、ボザのサクソフーン作品の作品数すら把握されていないのが現状である。

本論文では、《コンチェルティーノ》におけるボザの書法の特徴を明らかにした。第1章では、サクソフーンの歴史と《コンチェルティーノ》の時代背景を概観した。1930年代のパリでは、ミュールとミュールが率いる四重奏団の活躍が目覚ましかった。また、ドイツ出身で、ミュールよりも先にソリストとして名を上げていたシガード・ラッシャー Sigurd Rascher (1907-2001) もパリで演奏を行った。彼らの活躍によって、サクソフーンという楽器に注目が集まり、作曲家はサクソフーンのための作品を作曲した。また、そのためにサクソフーンという楽器の芸術的な価値が上がっていったとも言われている。このような時期にボザの《コンチェルティーノ》は作曲された。

第2章では、ボザとサクソフーンについて論じるとともに、ヴィラ・メディチで作曲されたことの意味を考察した。管楽器のための室内楽作品で有名なボザだが、その中でもサクソフーンという楽器は重要な位置を占めており、その楽器法にも精通していた。ボザが《コンチェルティーノ》を献呈したミュールは、ボザの才能を認め、《アリア》、《アンダンテとスケルツォ》、《コンチェルティーノ》を重要な作品と位置付けている。これらの作品は全てローマで作曲されているが、この頃、ローマ賞受賞者としてヴィラ・メディチに滞在していた作曲家のなかで、サクソフーンのための作品を書いている作曲家は他にいなかった。そのため、ボザが1938年にローマで《コンチェルティーノ》を作曲したことは珍しいことであった。

第3章では、ヴィラ・メディチでボザと接点のあったジャック・イベル Jacques Ibert (1890-1962) の《コンチェルティーノ・ダ・カメラ *Concertino da camera*》(1935) とボザの《コンチェルティーノ》を分析し、比較することで、《コンチェルティーノ》におけるボザの書法の特徴を考察した。この分析と比較によって、ボザとイベルの類似点が多く挙げられた。拍子、速度、調性、楽曲の形式は類似していることが多く、モチーフの類似もみられた。また、伴奏の仕方や、旋律に対してアーティキュレーションの指示を細かくしていることも共通点として挙げられる。一方で、ボザの特徴も浮かび上がった。第1楽章においては、ボザは主題を労作しており、主題へのアプローチの仕方にイベルとの違いが出ている。また、教会旋法の使用、五音音階の使用は、ボザにしかみられない。特に、この教会旋法の使用によって、あくまでも調性に縛られているイベルとは異なり、ボザは旋法の中心音に縛られている。

以上の考察から、《コンチェルティーノ》におけるボザの書法の特徴として、主題の労作や、教会旋法や五音音階の使用が挙げられた。一方で、イベルとの類似点もみられたため、ボザは《コンチェルティーノ》において、イベルの様式を受け継ぎながら、そこに自身の書法を加えていると考えられる。ミュールは、演奏活動の頂点とされるボストン交響楽団との合衆国ツアーに合わせてリサイタルを行っており、その際、ボザの《コンチェルティーノ》を演奏している。ボザの《コンチェルティーノ》を演奏したことは、ミュールがボザの《コンチェルティーノ》を世界に広めたということでもあった。